

「教育臨床総合研究 特別号」

島根大学教育学部1000時間体験学修10年間の歩みと検証

Steps and Inspection of “Activities for Education Experience” for the Past 10
Years in the Faculty of Education, Shimane University

大谷 修 司*	稲垣 卓 司**
Shuji OHTANI	Takuji INAGAKI
足立 智 昭***	寺井 由 美***
Chiaki ADACHI	Yumi TERAJ
藤田 耕 一***	村上 幸 人***
Koichi FUJITA	Yukito MURAKAMI
光森 智 哉***	長岡 み さ***
Tomoya MITSUMORI	Misa NAGAOKA

要 旨

島根大学教育学部の1000時間体験学修は、平成16年の学部改組とあわせて立ち上げられ、平成25年度で10年目をむかえた。本体験活動の設立の目的、10年間の歩みと、成果と課題について述べる。

〔キーワード〕 島根大学教育学部、1000時間体験学修、10年の歩み、成果と課題

I はじめに

島根大学教育学部は、平成16年に鳥取大学との間で、新課程と教員養成課程の定員を交換し、山陰で唯一の教員養成学部として改組した。その際、1) 21世紀にふさわしい教員養成プログラムはどうあるべきか、2) 教員養成学部の教育組織とシステムはどうあるべきかについて検討を行った。我々は、学生たちが4年間で確かな教師力（教育実践力、対人関係力、自己深化力）を身に付けるためには、通常の大学での理論的学習だけでなく、1年から4年までの体系的な学校教育実習に加えて、地域社会で子どもや教師、社会人と直接関わる中で自らが主体的に多くの体験を積んでいくことが必要なのではないかと考えた。また、必要と考えられる体験をカリキュラム化した結果、卒業要件として合計1000時間の附属学校、公立学校、幼稚園、保育園、社会教育施設等が企画する体験活動や大学でのセミナー形式の授業等に参加することを学生たちに義務付けることとなった。この1000時間体験学修を支える組織として交流人事によ

*島根大学教育学部自然環境教育講座（附属教育支援センター兼任）

**島根大学教育学部心理・発達臨床講座（附属教育支援センター兼任）

***島根大学教育学部附属教育支援センター

り島根県、鳥取県の現職教員を専任教員として迎え、多くの教育学部教員が兼任教員として加わる教育学部附属教育支援センターが立ち上げられた^{1), 2)}。

1000時間体験学修プログラムが従来の学部教員養成カリキュラムと相互補完的に機能し、学生に以下の効果を及ぼすことが期待されて開始した²⁾。

1. 専門科学等学修と体験学修の往還がもたらす実践的思考力の開発
2. 生きた子どもとの直接的な接触がもたらす深い子ども理解
3. 社会参加，ボランティアによって培われる社会成熟性，行動力，自己学習力
4. 多様な体験がもたらす教育実践力と教職意欲向上

平成25年度が1000時間体験学修10年目にあたることから、本稿ではその概要と10年間の歩みを述べ、その成果と今後の課題を報告する。それぞれの1000時間体験学修の具体的な内容と検証に関してはこの論文集の掲載論文に詳しいので個別に参照されたい。

II 1000時間体験学修とは

本体験学修は、この10年間に現実にあわせるため、特に選択時間の内容が少しずつ多様化をしてきたこともあり、時間数を2度変更してきた。現在は1000時間体験学修は基礎体験領域、学校教育体験領域、臨床・カウンセリング体験領域の三つの領域からなり、それぞれ必修時間は110時間、340時間、150時間の計600時間である（表1）。なお、選択時間は平成16年度から19年度が410時間、平成20年度から21年度は360時間であったが、平成22年度からは400時間となっている^{1), 2), 3)}。

表1. 1000時間体験学修の領域と時間

体 験 領 域	必修時間		選択時間
	基礎体験領域	110	
	学校教育体験領域	340	
	臨床・カウンセリング体験領域	150	

基礎体験領域の必修は大学や社会教育施設でのセミナー形式の活動である。学校教育体験領域の必修は附属学校園等での学校教育実習であり、1年生から3年生までを通した学校教育実習Ⅰ～Ⅴとその事前事後指導にあたる教育実践研究を含むものである。臨床・カウンセリング体験領域は、いじめや不登校について理解を深め、カウンセリングの知識・技能・態度を身に付けたり、グループ活動を主体とした学級集団作りを目的とした体験学習や特別支援を要する児童生徒への関わり方や支援方法に関する演習や講義から構成される。残りの選択400時間の大部分は基礎体験領域で実施するもので、学生が教員としての資質・能力の向上を図るために、それぞれが興味・関心のある活動に参加し、活動を通して自分の課題に気づき、課題解決の方向性を見つけ、活動への取り組みを深めていくことを目指している。選択の基礎体験活動にはサタデースクール等の学習支援、学童保育、地域イベント、社会教育施設での子供との活動等がある。

学生は平均すると1年に100時間の選択活動を行えば4年間で400時間を実施することになり、

卒業に必要な1000時間を達成できることになる。選択の場合、学生が募集された活動の登録を済ませると、教育支援センター専任教員が学生に対して、事前指導を30分行う。活動記録票を用いて、学生が何を学びどのような力をつけたいのか、活動に対する目的を明確にさせ、子供や地域の方などと関わる視点を確認する。活動終了後は30分の事後指導があり、振り返りシートに記入することで成果や課題を明確にしたり、他の参加者との共有を図ったりしながらこの体験を今後の活動に活かしていく(図1)。



図1 基礎体験活動の申し込み方法と時間認定までの流れ

表2. 1000時間体験活動教育課程表(必修)

教育体験活動の領域	コア授業科目	体験活動内容	時間数
			必修
基礎体験領域	入門期セミナーⅠ		20
		入門期セミナーⅡ	15
		基礎体験セミナー	15
		介護等体験事前指導	4
		介護等体験(特別支援教育体験活動)	16
		介護等体験(福祉施設介護体験)	40
	小計		110
学校教育体験領域	学校教育実践研究Ⅰ		30
		学校教育実習Ⅰ	20
		学校教育実習Ⅱ	20
	学校教育実践研究Ⅱ		30
		学校教育実習Ⅲ	40
		学校教育実習Ⅳ	160
学校教育実習Ⅴ		40	
	小計		340
臨床・カウンセリング体験領域	生徒指導論・進路指導論(初等)		30
	生徒指導論・進路指導論(中等)		
		C系(生徒指導・進路指導・保護者支援の臨床技術)	20
	教育相談の理論と実際(初等)		30
	教育相談の理論と実際(中等)		
		G系(子ども理解・学級集団形成の技術)	20
	特別支援教育基礎		30
		特別支援教育相談実習	20
	小計		150
	総計		600

*教育課程表の備考や換算単位などは省略しており、正規のものは教育学部履修の手引きを参照のこと。

この作業を1年から4年生まで繰り返すことで学生は教師力を次第に身につけていくことになる。我々は1000時間体験学修全体が、有機的につながった学生各自がオーダーメイドしたカリキュラムと捉え、ボランティアでなく、あえて1000時間体験学修と呼称している。表2及び表3に現在の体験活動の一覧を示す⁴⁾。

表3. 1000時間体験活動教育課程表（選択）

教育体験活動の領域	コア授業科目	体験活動内容	時間数
			選択
基礎体験領域		学校体験（幼稚園・小学校）	400
		学校体験（中学校・高等学校）	
		学校体験（特別支援学校・学級及び通級指導教室）	
		行政連携事業（放課後・休日の活動）	
		社会教育施設での体験	
		各種団体での体験	
		実習 Semester 体験	
		専攻別体験	
		大学主催の体験プログラム	
		その他の教師力向上のための体験	
		プロフィールシート	
		面接道場	
就業体験			
学校教育体験領域	特別支援教育実践研究		400
		特別支援教育実習	
		学校教育実習 VI	
総 計			400

*教育課程表の備考や換算単位などは省略しており、正規のものは教育学部履修の手引きを参照のこと。

Ⅲ 1000時間体験学修運営組織

本体験学修の運営は教育支援センターが中心に行っているが、基礎体験領域は、兼任の教育支援センター長、交流人による専任教員4名と事務担当の2名が中心となって運営を行っている。また、学校教育体験領域は、兼任の学校教育実習担当部長、各専攻からの教員と教育支援センター専任教員から構成されている。この委員は学校教育実習のほか、学校教育実習の事前指導、事後指導にあたる学校教育実践研究Ⅰ・Ⅱを担当し、学校教育実習中は当番制で朝礼と終礼に参加し必要に応じて助言や指導を行っている。臨床・カウンセリング体験領域では、臨床心理士の資格を有す専任教員と嘱託講師が担当し、教育支援センターの専任教員も授業に加わり、学校現場の様子等を学生に伝えたりしている。また、特別支援に関しては、心理・発達臨床講座の専任教員が担当している。

IV 1000時間体験学修の3領域

1. 基礎体験領域

地域の様々なイベントや学校などでの支援活動を通して、教師にとって必要な資質や能力を育成する領域である。必修では基礎体験セミナー、入門期セミナーⅠ、Ⅱ、介護等体験があり、選択では幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校・学級などの学校体験、放課後や休日を活用した行政との連携事業、社会教育施設での体験、各種団体での体験、3年生での実習 Semester 体験、環境寺子屋での理科や家庭科に関する体系的な体験、大学主催のビビット広場での体験、専攻別体験などがある。

(1) 必修活動の例

1) 基礎体験セミナーは1年生か4年生まで、各学年ごとにグループ協議を中心として、学年全体やグループ内でのこれまでの振り返り活動から、各自の成果や今後の課題を明らかにしていく活動である。

2) 入門期セミナーⅠは、新入生全員が入学直後に1泊2日の日程で社会教育施設で行うものである。上級生が企画する活動であり、1年生だけでなく2、3年生にとっても企画力、指導力、コミュニケーション力等を伸ばす良い機会となっている。

(2) 選択活動の例

1) ビビット広場

教育学部の学生が、松江市の小学生に対して様々な活動を大学内の施設を利用して休日に実施している活動である。ビビット広場の活動を選択登録した学生たちは年4回の活動を実施するが、学生たちは数か月前から昼休みを利用し企画立案をし、当日は子ども達と共に活動し、子どもを理解し、指導力を身につけている。

2) 実習 Semester

教育学部では3年生後期に学校教育実習があるため、授業の欠席が多くなるという課題があった。そこで本学部では3年生後期を通常の授業がない Semester とし、「実習 Semester」と名付けた。学校教育実習以外の時期を利用して学校教育実習とは異なった学校体験活動をするために、学生が公立学校や幼稚園を選択して参加できる体制を整えている。

3) 専攻別体験活動

各専攻が主体となって企画、実施する活動である。それぞれの専攻で学生と教員が共にそれぞれの専攻の特徴を生かした普段の講義、実験でできない活動を学内や学外で行うものである。そのため専門性が高く、1000時間体験活動と普段の講義・実習等をつなぐ役割を果たしている活動である。

4) 環境寺子屋

教育学部では平成20年度に、自然科学に強い教員を育てることを目標に、理科と家庭科の内容を主とした環境寺子屋を立ち上げた。年間約200時間の実験や野外での活動を主としたプログラムであり、学生は環境寺子屋に入塾し、体系的な活動を行っている。

2. 学校教育体験領域

幼稚園の一部の実習をのぞき、附属学校園で行う学校教育実習であり、1年生から3年生ま

でを通した学校教育実習Ⅰ～Ⅴとその事前事後指導にあたる教育実践研究ⅠとⅡを含むものである。

1年生では、観察を主とした学校教育実習Ⅰとその事前事後指導にあたる学校教育実践研究Ⅰがある。1年生は附属学校園に計5日でかけ、附属学校教員の授業観察をもとに、学生同士で授業協議を行う。実習Ⅰでは教えられる側から教える側への意識の転換を図ることを主な目的としている。2年生では運営は各専攻にゆだねられており、附属学校園での授業参観、模擬授業などを行っている。3年生はいわゆる本実習であり、実習Ⅲでは1週間附属学校園に出かけ、生徒や教員との交流を通じて実習Ⅳに向かう準備期間である。実習Ⅲの学生同士の班は実習Ⅳでも継続しクラス運営、共同立案授業を行っている。実習Ⅳは20日間あり、小学校では共同立案を中心に行い、専門性を高めるためにその他の教科で数回の個人立案を行っている。中学校ではクラスに配当されるが、各学生の専門の教科で自主立案を行い、道徳等で共同立案を行っている。幼稚園は実習Ⅲは附属幼稚園で行っているが、実習Ⅳは松江市内の公立または私立幼稚園での実習を行っている。

3. 臨床・カウンセリング体験領域

臨床カウンセリング体験領域では、3つのコア授業と、それぞれのコア授業に対応した3つの体験活動から構成されている。

コア授業は、1) 生徒指導論・進路指導論、2) 臨床教育相談論、3) 特別支援教育相談論であり、おのおの30時間の集合教育を実施する。コア授業の受講後の体験活動として、1) 生徒指導・進路指導・保護者支援(C系：CounselingのC)、2) 子ども理解・学集集団形成をG(Group ApproachのG)、3) 特別支援教育相談実習がおのおの20時間設定されている。

C系では、心理テスト・描画などの体験を通して自己理解を図り、コミュニケーションスキルなどの演習によって自己課題の把握を試みている。G系では、グループディスカッションや演劇などの体験を通じて、自己表現・協力・リーダーシップ等を学んでいる。特別支援教育相談実習では、LD児・ADHD児などの特別な支援の必要がある子どもに関する理解や、保護者相談・校内支援体制づくりなどを実践的に学んでいる。C系、G系は2年後期から3年前期に行われ、特別支援教育相談に関する実習は3年生後期に行われる。

学生たちはこれらの授業を通して、いじめや不登校、学校崩壊などの今日的な教育課題についての理解を深め、これららの課題に対する上で必要となるカウンセリング・マインドを育てている。なお、平成25年度入学生より、表2のように若干課程表に修正を行っている。

V 1000時間体験学修の評価、意識づけ

学生の学びの振り返りの機会は、さきほどに述べた各活動後に事後指導を受け、振り返りを行うことであるが、もう一つは、各学年で基礎体験セミナーを実施し、これまでの成果と今後の目標や課題を明確にする作業を1、2年生は年2回、3、4年生は年1回実施している。この活動は学生がお互いに経験を共有する機会にもなっている。

我々は学生が身につけて欲しい資質や能力を10の教師力としてとらえ、その内容は教育実践力としての1) 学校理解、2) 学習者理解、3) 教科基礎知識・技能、4) 授業実践研究、対

人関係力としての5) リーダーシップ・協力, 6) 社会参加, 7) コミュニケーション, 自己深化力としての8) 探求力, 9) 教師像・倫理, 10) リテラシーである¹⁾。この10の軸による評価は通常の授業と1000時間体験学修の両方で行っており, 学生の学びは, 体験活動ごとの活動記録票の振り返りシートの自己評価に加えて, この10の軸をもとにしたプロフィールシートで点検・評価をし, 身についた教師力を分析するものである。その後, 指導教員が面接によるアドバイスを学生に対して行っている。

評価の一つの手法として, 我々は学内資格を認定する制度を運用している。これは1000時間体験学習を時間数だけでなく, 質的な評価を行う観点から, 学生が一定の時間的質的な体験を行ったときに, 学内資格を与える制度である。各専攻ごとの資格の他, 教育支援センターが主体となって認定する資格がある¹⁾。その一つとして学校教育サポーターは, 1) 学校をフィールドして150時間を超える体験をしていること, 2) 臨床・カウンセリング領域において, 体験活動への関わりが積極的でありコア授業で優秀な成績を修めていること, 3) 学校教育実習で良好な成績を修めていること, 4) 事後指導において学校理解, 子ども理解で高い学習成果が得られ, 学校においてすぐれた指導力を発揮し顕著な功績があったと評価されていること, 以上4つの要件の基準を満たした場合に認定されている¹⁾。

VI 1000時間体験学修のこれまでの成果と課題

ここでは, 1000時間体験学修の中で, 400時間を占める選択制の基礎体験活動の成果と課題について述べる。学校教育体験領域と臨床・カウンセリング体験領域については, 本論文集の掲載論文を参照されたい。

1000時間体験学修を開始した頃は, 本体験学修を各種事業所に周知するために時間がかかり体験先も限られていたが, 受け入れ側にとっても学生が参加することで活動が充実することから年を追うごとに募集数は増加した。本体験学修の平成19年度の募集活動数は369, 学生の参加人数は2012人であったものが, 平成22～24年は募集活動数が500を超えており, 学生の述べ参加人数も約2300～2500人で推移している^{6), 6), 7)}。募集活動数の増加は, この1000時間体験学修の取り組みが, 地域に浸透してきた成果と考えられる。その一方で, 教育学部の学生数は各学年約170名で一定であり, せっかく学生の募集があっても学生が参加できない場合も多く生じてきている。各活動に対して学生参加人数の上限を設定し, 学生の参加対象が広がるようにする必要も考えられる。また, 学生自身の課題であるが, 活動の対象が限られたものになる学生もおり, 苦手な体験や関心が少ない体験についても参加するように意識付けをしていく必要性も感じている。なお, 各事業所とは4月と2月に基礎体験活動連絡会議をもち, 質の改善を図るために1000時間体験学修の概要と目的を共有し, 事業所からは学生の活動の様子や改善点などを報告して頂いている。

平成23, 24年度に行った基礎体験活動における4年間の学生の学びの変容を調査した結果, 本活動への有意義感がいずれも8割を占めたこと^{6), 7)}, 卒業後の進路決定にも6割強の学生が影響を受けたと感じたことが報告されている⁷⁾。平成23年度に行った松江市でのサタデースクールの事業を特にとりあげた調査では, コミュニケーション能力の伸長と学校理解の促進が図られたこと, その一方で自分の学習指導技術が未熟であったという課題を見出す機会になったこ

とが報告されている⁸⁾。また、平成24年度に行った3年生の実習 Semester が学校教育実習との往還関係のうえに成り立ち、学生の学校理解を促し、教師としての自己有用性を高め、教師になろうとする指向性を高める役割を果たしていること、受け入れ校からも学生の活動の様子について全般的に高い評価を得ていることが報告されている⁹⁾。平成25年度に1000時間体験学修の活動時間と就職志向や教員採用の傾向を調べたところ、体験活動時間が増加するにつれて、現役での合格率が増える傾向が認められた。その要因の一つとして、学生たちが体験活動を通じて多くの人と係り、コミュニケーション能力や自己アピールの方法などが身についた結果ではないかと報告されており、学生の教員志向、熱意を反映したことを読み取ることができる¹⁰⁾。平成24年度末にこれまでの卒業生全員に対して1000時間体験学修のアンケートを送付し、回収結果をもとにその成果と課題をまとめた(本論文集、藤田他)。「1000時間体験学修の基礎体験活動での学びはありましたか」について4段階評価で回答を求めたところ、回答した176人のうち、たくさん学びがあったが118名(67%)、どちらかという学びがあった55名(31%)であり、あまり学びが無かったが2名(1.1%)、全く学びがなかったが1名であった(0.6%)。このように1000時間体験学修は、多くの学生にとって意義のある体験であったことがうかがえる。

学生が努力して取得した学内資格は、教員採用試験の願書に記載したり、面接の際に自分のアピールとして活用しているが、教員採用側の各県の教育委員会に十分に理解していただいている段階に至っていない。学内資格は、1000時間体験学修における学生の成長を質的量的に認定した資格であり、毎年行っている島根県教育委員会や鳥取県教育委員会との情報交換会等を通じて、学内資格制度についてさらなる理解を求めていく必要がある。

これまで1000時間体験学修ができずに卒業できなかった学生は一人もいない。ただし、学生によって取組時間数に差があり、4年生の後期にかなりの積み残しをして周囲の協力を得てなんとか1000時間をクリアする学生たちもいる。しかし、ここで強調したいのは、選択の基礎体験活動は400時間で良いにもかかわらず、ここ数年の時間数は平均で600時間を超えており、卒業時の総時間数は平均で1200時間(平成24年度)である。このように多くの学生は体験学修活動を積極的に実施していることが伺われる。2013年8月の教育学部オープンキャンパスで高校生を対象とした学生フォーラムでは、2、3年生が自分の1000時間体験学修の体験を発表したが、高校生に対し時間をかけた体験をもとに自分の言葉でしっかりとした口調で自信をもって発表をしている姿があった。ここでも学生たちは確実に地域の中で成長をしていると確信をしたしだいである。

今年で1000時間体験学修は10年目を迎えるが、総じて受け入れ先からは高い評価を得ている。学生の事後指導でも多くの学びを得ていることが伺われている。今後も学生の有意義感が増すように、受け入れ事業所との連携を深めながら体験活動を進めていきたい。また、1000時間体験学修の内容や運営の仕方等についても、学生にとってよりよいものとなるように検討を加えていきたい。

謝辞

1000時間体験活動は、多くの方々のご協力のもとで実施することができた。まずは、主体的積極的に体験活動に取り組んだ教育学部学生の皆さんに感謝したい。受け入れ先となってくださった学校、行政、社会教育施設、福祉施設、民間団体の方々、特に教育実習でお世話になった附属学校園の先生方、本体験活動全般で様々な支援協力を頂いた教育学部の先生方、事務の方々にお礼申し上げる。最後に本体験活動を内部から支えていただいた島根県および鳥取県からの交流人事で専任教員として勤めていただいた先生方にお礼申し上げる。

参考文献

- 1) 島根大学教育学部附属FD戦略センター 2010. 確かな教師力を育む多角的評価の実現. 平成19・20・21年度特色ある大学教育支援プログラム. 特色GP成果報告書. 高浜印刷, 松江, 91 pp.
- 2) 畑克明・森本直人 2005. 教育体験活動(1000時間体験学修)の概要. 島根大学教育臨床総合研究 4:1-12.
- 3) 島根大学教育学部 2010. 履修の手引き 平成22年度. 112 pp.
- 4) 島根大学教育学部 2013. 履修の手引き 平成25年度. 128 pp.
- 5) 長澤郁夫・池山圭吾・福間敏之・山本幸市・境英俊 2011. 平成22年度の基礎体験領域の取り組みについて. 島根大学教育臨床総合研究 10:1-14.
- 6) 長澤郁夫・藤田耕一・山本幸市・村上幸人・境英俊 2012. 平成23年度の基礎体験領域の取り組みについて. 島根大学教育臨床総合研究 11:1-14.
- 7) 山本幸市・長澤郁夫・藤田耕一・村上幸人・大谷修司 2013. 平成24年度の基礎体験領域の取り組みについて. 島根大学教育臨床総合研究 12:1-15.
- 8) 山本幸市・福間敏之・村上幸人・長澤郁夫・藤田耕一・境英俊 2011. サタデースクールで学生が身につけた教師力の分析. 島根大学教育臨床総合研究 10:15-24.
- 9) 山本幸市・福間敏之・池山圭吾・長澤郁夫・藤田耕一・境英俊 2012. 実習セメスターにおける学外学校体験の評価と検証. 島根大学教育臨床総合研究 11:15-26.
- 10) 村上幸人・長岡美沙・山本幸市・長澤郁夫・藤田耕一・大谷修司 2013. 基礎体験領域取り組み時間数と教員採用試験等就職実績の関連傾向について. 島根大学教育臨床総合研究 12:17-28.
- 11) 小川巖・嘉賀収司・斎藤英明・山中慎嗣・秦光司 2007. 基礎体験領域における課題省察とカリキュラム構成思案. 島根大学教育臨床総合研究 6:25-30.
- 12) 青山巧・長澤郁夫・嘉賀収司・斎藤英明・小川巖 2008. 実習セメスターにおける学校教育体験と教育実習の往還関係について. 島根大学教育臨床総合研究 7:15-19.
- 13) 福間敏之・青山巧・池山圭吾・長澤郁夫・小川巖 2010. 基礎体験領域で学生が身につけた教師力の基礎とは何か. 島根大学教育臨床総合研究 9:21-29.